

アジア特許情報研究会設立 10 周年に際して

維新国際専利法律事務所
所長・弁護士・弁理士 黄瑞賢

この度は、アジア特許情報研究会の設立 10 周年を迎えられたことを心よりお祝い申し上げます。ここでは、日本人が台湾及び中国で特許出願及び権利化をする際に注意すべき点の一つを、簡単に紹介させていただきます。

各国の明細書（特許請求の範囲、図面及び要約書を含む、以下同じ）は当該国の言語で書かれることになり、権利範囲の解釈や侵害認定の判断の際は、当該国の言語で書かれた明細書が主な判断基準となります。そして、海外へ出願する際には、原則として日本語明細書を外国語書面として提出するとともに、当該国の言語による明細書（翻訳文）を提出することになります。出願後の中間処理もこの翻訳文を基準として行われます。この翻訳文は現地代理人より作成されるのが一般的です。ここで非常に重要な点があります。即ち、代理人が作成した翻訳文は外国語書面（日本語明細書）の内容を忠実に反映しているのか、また審査において明細書の補正がされた場合、その補正内容は出願人（又は日本代理人）の指示に忠実に従ったものであるのか、という点です。日本語明細書と翻訳文との翻訳における内容の“ずれ”が問題となります。

この翻訳の“ずれ”は大きく 2 つに分けることができます。1 つ目は化学分野で度々みられる数値範囲で限定された請求項において、数字の漏れや誤り等の「誤記」、2 つ目は翻訳者の日本語能力、専門性、技術理解度や文章理解力の欠如により、日本語明細書の正確な意義が理解されない又は正確な論理構成がされていないといった、広義の「誤訳」です。こうした翻訳の“ずれ”が非常に軽微なものであれば大きな問題とはならないのですが、場合によっては権利範囲の解釈や侵害認定の判断にも大きな影響を与えることがあります。

例として最近ある代理人の方から聞いた話を紹介します。外国企業がインドネシアへ特許出願をし、インドネシア人が翻訳文の作成を行ったのですが、その翻訳文は Google 翻訳された内容がそのまま提出されていることがわかりました（人的なチェックなし）。これは非常に重大な問題です。しかし、インドネシア語を全く理解できない外国人にとっては、出願前に翻訳文の内容をきちんとチェックすることには、困難が伴うのが通常です。

話を台湾及び中国へと戻しますと、知財において中国は今後ますます無視できない存在となってきます。もちろん、中国での明細書は中国語（簡体字）で作成されるため、一般的な日本人には正確な内容は理解できません。加えて、中国には代理人事務所が山のよう存在しや信頼できる事務所を見つけることが難しい点や、信頼できる弁理士を見つけたが数年後には別の事務所へ異動していたなど、中国特有の問題や不確定要素が多く存在し

ます。こうした問題にどう直面し解決していくかを考えなければなりません。

ここで、上記の問題を解決する1つの方法を提案させていただきます。それは中国への特許出願や権利行使において、台湾の事務所を使用するというものです。台湾と中国はいずれも中国語（字体が相違するのみ）で読み書きを行うことから、台湾事務所が中国の案件を管理することで、上述した問題の発生を抑制することができます。この方法には以下のメリットが存在します。(1)中国事情に詳しい台湾事務所が間に入ることで安心感が増加、(2)台湾と中国による相互チェックで翻訳等の質が向上、(3)中国事務所とのやり取り・交渉の円滑化、(4)案件の性質にふさわしい中国事務所を紹介可能。

ここで(2)の翻訳の質向上についてのみ、簡単に説明を加えますと、明細書の翻訳文作成において、翻訳は台湾事務所が行います。その後台湾事務所の所内チェックを経て、中国事務所へ送付し、今度は中国事務所において改めてチェックが行われます。チェック作業時には、もちろん日本語明細書と照らし合わせて、上述した誤記や誤訳がないかどうかの確認がされます。つまり中国出願の場合、従来であれば中国事務所のみがチェックを行っていたものを、台湾事務所と中国事務所の2か所によりチェックが行われることで、誤記や誤訳の発生を抑えることができます。

その他の点について、ここでは詳細な説明は省略いたしますが、この方法は全体を通して台湾事務所による丁寧な管理及びチェックに基づいています。また、台湾はPCTに加盟していませんが、この方法はパリルートであれ、PCTルート（中国出願はPCT,台湾出願はパリ）のいずれであっても対応可能です。台湾事務所を介して中国への出願等を行うことも可能であり、且つメリットが多いということを1つのトピックスとして紹介させていただきました。

最後に未筆ながら、アジア特許情報研究会の一層のご発展と皆様方のご活躍を祈念致しまして、お祝いの言葉とさせていただきます。